

◇展示

○平成二九年五月一日～六月九日

春季展示「江戸時代、近江の湖辺うみべの暮らし」

○平成二九年一月一日～一月一七日

企画展「胸にふるさと心に商い―近江の商人きんんど、旅の空

企画展「胸にふるさと心に商い―商いへの旅立ち―」

・「峠の向こうに何がある―商いへの旅立ち―」

本学名誉教授 宇佐美英機

・展示解説

青柳周一

◇開催の記録

今回の春季展示では、江戸時代の琵琶湖の姿と、その湖辺で繰り広げられた人びとの暮らしの諸相を伝える史料や絵図を取り上げることとした。琵琶湖とは、地元の人びとが水運や漁業を営む生計の場であり、近江八景に代表される美しい景観で知られる名所でもあった。しかし琵琶湖は時として船の遭難事故や水害を引き起こし、人びとの生活に重大な被害を与えた。こうした多様な側面を持つ琵琶湖と共に生きた人びとの歴史的な営為について明らかにすることが、この展示の狙いである。(なお二九年二月から一二月にかけて、青柳は滋賀民報紙上で同タイトルの連載を行った。連載は史料館収蔵史料の紹介を目的としたもので、春季展示ともタイアップする内容とした)。

実際の展示では、最初に「琵琶湖の水運と「彦根三湊」という、松原湊・米原湊・長浜湊について扱うコーナーを設けた。ここでは、それぞれの湊の構造が描かれた絵図を中心に、松原内湖での漁業や、米原湊と大津との間に就航していた車早船に関する史料などを組み合わせて展示し、彦根藩領での各湊の役割や特徴を現地で展開した人びとの営みと共に解説した。次の「琵琶湖の漁業」のコーナーでは、大浜村(現長浜市大浜町)の大浜家文書を中心に、琵琶湖での多彩な漁業について扱った。最後に「近江一国絵図と湖辺の城郭」として、近江国の全体像と近江八景ほか数々の名所、また膳所城や彦根城を描き込んだ絵図「湖水浦廻り名所・寺社便覧図蹟」を展示した。

今回の観覧者数は六九七人(学外二四五人、学内四五二人)で、前年より一三七人増加した。

昨年に引き続きギャラリートークを六回実施し、参加者は平均一六人であった。彦根三湊を大きく扱った展示であったこともあり、その地元(とくに米原市)の方々による観覧が多かった。史料館の展示は収蔵史料の研究成果を地元へ還元することを目指すものであり、今回はある程度そうした目的を達成し得たと考える。

秋季企画展は、昨年度の企画展「近江商人とみちのく」に引き続き、近江国から遠く離れた諸地域に進出した近江商人とその史料を取り上げて、近江商人の活動範囲の広さと進出地の多様さとともに、近江商人史料がそれら諸地域の歴史を研究する上でも大きな可能性を秘めていることを示そうとしたものである。

また、これまで史料館とNPO法人近江たねや文庫とは長年にわたる共同研究を積み重ねてきた。そこで、今回の展示においてその成果

を改めて公表するべく、共同企画として実施することとした。

具体的には、共同研究成果として史料館『研究紀要』に掲載された論考のうち、宇佐美英機・川島民親「近江商人川島宗兵衛家研究序説―その創業と経営活動」、川島民親・桂浩子「近江商人川島宗兵衛家の西国商い」、桂浩子「近世・近代の史料にみる近江商人の旅」（以上、『研究紀要』三五・四七・五〇号に掲載）の内容に依拠しつつ、そこで取り上げられた史料を中心に展示を構成した。

展示冒頭の「旅する近江商人」というコーナーでは、「前川善三郎翁行商の図」などの絵画資料によって近江商人と旅についての具体的なイメージを観覧者に示すことを試みた。続いて「中国・九州へ―五個荘・川島宗兵衛家文書」、「北海道へ―柳川・柴谷家文書と八幡・西川伝右衛門家文書」、「関東へ―八幡・市田清兵衛家文書」といったコーナーを設けて、それぞれの商家とその進出地に関する史料を展示した。

観覧者による展示内容の理解を助けるために、前掲論考中の豊富な地図や表をパネル化して掲げると共に、川島家の持ち下り商いで実際に使われた布見本帳なども展示した。また西川家が蝦夷地から持ち帰った土産物に関する史料の参考資料として、松浦武四郎記念館およびアイヌ文化振興・研究推進機構からアイヌの工芸品の画像をご提供いただき、パネル化して掲げた。最後に「近世・近代の日本を旅する」として、近江商人が旅した時代とそのあとの時代の地図を展示した。

観覧者数は四二三人（学外三三〇人、学内九三人）であった。衆院選（一〇月一〇日公示、二二日投票）と会期冒頭の新聞記者発表のタイミングが重なったこともあってか、例年に比べ新聞記事掲載が少なかつたようである。より有効な集客につながる展示情報の発信方法は

見出し得ておらず、今後も課題とせざるを得ない。ただし今回の展示テーマやポスターのデザインは、これまでよりも堅苦しくなく、人目に付きやすくすることを目指したもので、聞き及んだ範囲では好評であった。

また、史料館は「かんさい・大学ミュージアム連携」の実行委員会に参加しており、そこで企画されたバスツアー「大学建築を探る」ヴォーリズと村野藤吾」にも協力し、本学でのツアーのコースに秋季企画展も組み入れた（一〇月二七日、見学四五人）。

ギャラリートークは計五回開催し、参加者は平均一一人であった。関連講演会への出席は四一人であった。（青柳）

#### ◇「菅浦文書」の再調査

今年度も史料館では科学研究費助成事業（基盤研究（A））「菅浦文書」の総合調査及び村落の持続と変容の通時代的研究」（研究代表者・青柳周一、一八年度より五年間）に基づいて、研究分担者（滋賀大学・滋賀県立大学・琵琶湖博物館の教員・学芸員）および研究協力者（東京大学史料編纂所教員、福井県教育委員会職員、京都大学院生およびOB・滋賀県立大学の大学院生OBなど）、リサーチ・アシスタント、研究補助者と共に、重要文化財「菅浦文書」の再調査を行った。具体的には、「菅浦文書」中の史料一点ごとに、研究史上でどのように解説・解釈されているかを点検してデータ化し、そのデータを踏まえて刊本『菅浦文書』の翻刻文を原本と照合してチェックする作業を実施した（原本保護の観点から、実際の照合作業には主にデジタル画像を使用）。「菅浦文書」での人物・年代比定や史料名なども再検

討した。

作業は研究会形式で六回行った。また、デジタル画像で確認できない箇所についての原本チェック作業を一回、長浜市西浅井町菅浦で現地史料の調査と撮影を二回行った。(青柳)

#### ◇附属史料館収蔵史料目録検索システムの構築と運用開始、ならびに利用規程の改正及び目録検索システム利用細則の制定

今年度、学長裁量経費の助成により、当館の収蔵史料目録をウェブ上で検索できるシステムを構築し、始動した。以前より、既存の検索システムを導入することも検討してきたが、定期的にメンテナンスやサーバの使用料が生じる契約では予算上支払いが困難と判断したため、一からシステムを構築し、本学のクラウドサーバで公開するという形での発注となった。

まず最初に史料目録のサンプルデータを作成し、業者とシステムの仕様・ページ構成・ページレイアウト・データ項目の選定・及びデータ型の仕様等を検討した上で構築作業に取りかかってもらった。

次に、館蔵分の文書群から検索システムでの公開を進めていくという方針に基づき、その中でも近江商人史料として代表的な「中井源左衛門家文書目録」からデータ整備を始めた。この史料は、二万点弱の大型文書群で当館の近世商家史料の中で最も利用の多い史料であるにもかかわらず、印刷目録は発行部数が限られる上、八〇〇頁にもなる大部で、紙媒体での検索が非常に困難な状態であった。今回検索システムに載せたことで、目録検索の利便性は飛躍的に向上した。また、伊藤長兵衛家文書目録(約八千点)についてもアップロードすること

ができた。

他にも昭和四〇年代に刊行された収蔵史料目録のデータ化(現在の目録項目に合わせた再調査を含む)に着手したので、検索システム上に掲げる史料目録は徐々に充実させていく予定である。館蔵史料全体の横断検索ができるようになれば、当館の保有する近江商人史料や地域の村落史料などの研究資源がさらに活用されるものと期待する。

さらにこの検索システムでは、史料一点ごとの詳細情報のページに、史料画像を掲載することができる。画像データが準備でき次第、ここに掲載してデジタルアーカイブとして利用に供していきたい。

また、このシステムの公開に向けて、「滋賀大学経済学部附属史料館利用規程」の一部を改正し、「収蔵史料目録検索システム利用細則」を新たに制定し、公開・利用についての体制を整備した。検索システムでは、この利用細則に同意した上でのみ検索画面にアクセスできることになっている。

最後に、短期間でのシステム構築であったので、利用上の不具合や要望が出てくることは必至と考える。今後も利用者の意見を踏まえて随時改良を重ね、利便性の高いものを追求していきたい。

#### ◇史料整理

三上家民俗資料(八三点)

#### ◇発行

SAMにゆうす四六号、四七号

『胸にふるさと 心に商い―近江の商人、旅の空』(平成二九年度企画

展図録)

◇学内雑誌掲載日本史論文

『彦根論叢』第四一四号「吾妻牧場と吾妻軌道―長野原の「上の段」と「下の段」を支えた二つの馬」企業―小川功

『滋賀大学経済学部研究年報』第二四卷「研究ノート」  
「具体的なイメージにふれるこの機会を、実際に各館を訪れてみるきっかけに」という企図―国立ハンセン病資料館二〇一七年度春季企画展「ハンセン病博物館へようこそ」と同展付帯事業「ハンセン病博物館へようこそ」各館活動報告会に寄せたノート―阿部安成

同「資料紹介」きりとる―国立療養所大島青松園キリスト教霊交会の写真―阿部安成

Working Paper No.267『読点、ひとつ―大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り』を読む―阿部安成

Working Paper No.270『伊藤本店店法則』宇佐美英機

Working Paper No.271『東京高等商業学校・商科大学における「グレント」―座談会「橋社会学の七十五年」(「一橋論叢」第24巻第5号(1950年11月)所収)を読む―坂野鉄也

Working Paper No.272『Un inmigrante japonés de Shiga quien decidió ser mexicano』BANNO, Tetsuya

兼任教員 須永知彦 学芸員 堀井靖枝 南田孝子  
非常勤職員 溝口智子

◇運営委員

金子孝吉 坂野鉄也 山田和代 渡邊凡夫 井澤龍

◇史料館職員

館長・専任教員 青柳周一